



序文

小児医療の潮流を読み、小児科がこれから進むべき道筋について考えることがこの臨時増刊号の趣旨です。

自然科学としての小児科学の本質は、人のからだが生作られる過程（成長）とそこに機能が宿る過程（発達）を生物学的に解明し、それらの異常の原因を突き止め、不可能であった診断や治療を可能にすることです。この領域での小児科学の進歩はめまぐるしいものがあり、この先もそのペースが衰えることはないでしょう。

一方、他のすべての領域がそうであるように、小児科も社会人文科学としての使命を担っています。そのような観点から、子どもたちが、どのような困難を背負っていても、たとえそれが生まれつきのものであったとしても、それらを克服し、幸せな人生を手に入れることができるように、子どもをとりまく環境の改善、とりわけ社会制度の整備を推進することが、今や小児科学の重要なミッションとなっています。

以上のことを念頭に、本特集の項目立てを行いました。少子化や人口の都市集中を受けて「地域医療」はますますその重要性を増し、それとともに問題点も浮き彫りになってきています。「予防医学」の推進は高齢者医療だけの課題ではありません。子どもの健やかな成長と発達を守る小児科医にとっても非常に重要なテーマとなってきました。「新生児医療」は新たな命を“授ける”医療、「救急・集中医療」はかけがえのない命を“守る”医療であり、その将来像を見据えることは小児医療全体の発展に不可欠です。そして「こどもの心の診療と社会」というテーマも小児医療の進むべき道筋を考える上で是非、論じておきたい点です。

この特集の企画を通じて感じたことは、自然科学としての小児科学の急速な進歩は、社会人文科学としての小児科学の充実に裏打ちされているということです。自然科学の成果を子どもたちのために活かすには、社会的視点、例えば倫理的な考え方やルール作りが必須です。特に「先端医学・難病対策」の領域ではそのことが浮き彫りになってきていると感じます。また、「医学教育・専門医制度」は小児科学・小児医療の将来を担う人材を育成するための基盤であり、小児科の行く末を左右する重要課題と言えます。

今回、以上のような論点を網羅し、それぞれの領域の専門家の方々に展望を述べて頂きました。近未来の小児科医は子どもたちのために何ができるのか、一緒に考えてみたいと思います。

2022年12月

「小児科」編集者一同